



TITLE:

雲崗通信

AUTHOR(S):

小野, 勝年; 日比野, 丈夫

CITATION:

小野, 勝年 ...[et al]. 雲崗通信. 東洋史研究 1941, 6(2): 147-153

ISSUE DATE:

1941-04-05

URL:

<https://doi.org/10.14989/145728>

RIGHT:

雲 崗 通 信

小野勝年・日比野丈夫



(1)

九月の末水野さん達の一行が雲崗を引上げて内地へ向はれた後、一緒に一旦大同へ出た日比野が食料を用意して再び雲崗に入つたのは十月一日の午後のことでした。いくら七月以來住みなれた土地とはいへ、これから暫らくの間獨り住居かと思ふと柄にないさびしい氣にもなりました。二十八、二十九兩日は雨で工事を休んだ様でしたが、三十日からは再び仕事を始めてをりました。

今度の石佛寺の工事といふのは、晋北政廳文教科が保存第一期計畫として興亞

院蒙疆連絡部の助成金を以て始めたものなのです。私共の仕事は政府の依頼によつて専門的な立場からこれを指導、監督し、學術的調査をするといふわけでした。先づ日比野が先陣を承つて何日かを務め上げると、小野が北京から來て代りさうして又何日かたつと水野さんがやつて來て後仕末をつけられるといふわけで、十一月の半頃には終る豫定でありました。工事は九月の半ばからぼつ／＼始つてゐたので、第九窟と第十一窟の前に試みに掘つた二本のトレンチも略々自然の地層に達し、月の末には昔の河床であつたらうと思はれる細かい砂の層が地表下三、四米の所からあらはれて來ましたそれで十月の始めにはもうその方を切り上げて、西方の第十九窟の前に幅四米の大トレンチを掘り始めてゐたのです。

時は正に最も時候のよい時でした。仕事にやつて來るのは苦力といつても、都會地附近に多い土方専門の苦力ではなくて皆村の百姓達です。雲崗附近では村民のことを老百姓といつてゐますが、日本でお百姓さんといふ言葉と全く同じなのです。だから彼等にとつては、十月が一

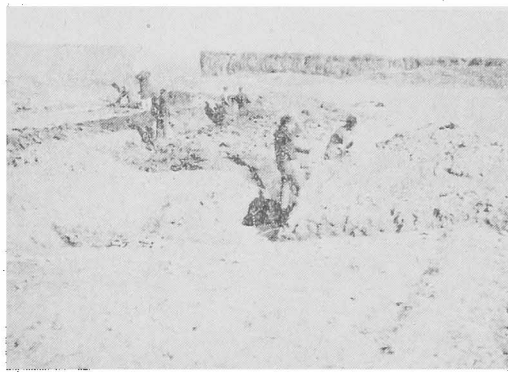
年中でも一番忙しい收穫時ですから、苦力の集りも餘り思はしくありませんでした。一家總出で刈りとつた稗麥が、驢馬の背で運ばれて夫々の中庭に山の様に積まれます。それが聯接シテといふ木製のから竿でたゞかれて、實をもがれた残りの藁束が平らな屋根の上に一日々々と積み重ねられて行きます。今度はその實をよく掃き清められた地面の上で、木の鋏ですくひ上げては空中に放り上げて風の力で實と皮とをより分けます。石佛寺の境内に立つて村の方を眺める、とあちこちに風に吹きとばされる穀物の殻が煙の様に見えました。それでも始めの中は百人を越えてゐた苦力が急に四五十人に減つたことがありました。これは軍の方で自動車自動車の修築が始つたので苦力がその方にとられて行くからでした。それは十日餘りも續きましたが、野良が閑になると又遠方の村からも、集つて來る様になりました。

晝の間は彼等を叱咤しながらシャベルを振ひ、廣い野つ原を馳け廻りました。土器や瓦を捨てない様にいつておくと、彼等はどんなかけらでも正直にとつて置

いて見せに來ました。何か變つたものがあると早速呼んで合圖をします。それを日比野は俄か考古學者になつて調べました。夜はランプの光で日記をつけたら支那語のおさらへをしたりするだけで、すっかり疲れて早く寝るのです。十月二十四日に小野も參りました。それから俄かに活氣づいて石佛の保存計畫を立案し終には史蹟學をも論するに至りました。十一月の十六日にはとうとう内地から水野さんも來りました。長く此處に居る間に何時とはなしに村の様子、村民の習慣、さういつたものも次第に判る様になりました。自分の使つてゐるボーイの結婚式、土匪のとらまつた話、村の子供を咬み殺した狼が射殺された話、警備隊長の逸話等々出來事は狭い雲崗にも少なくありませんでした。工事を引き受けた大同の某会社の現場に於ける態度などは特に私共の神經を刺戟させたもので、小さいことながら大陸に於ける請負業者の面白からぬやり口を見せつけられ不愉快な思ひをしたものです。

仕事を野良の忙しい最中に始めたものですから、苦力の日常も割合によい大人

一圓二十錢、小人七十錢といふきめでした。それに自分は一圓しか貰はない、或は一圓十錢だつたといつて訴へて來るものもあれば子供だと五十錢のもあれば三十錢のもあるといふ様なことも耳に入りました。それでだん／＼聞いてみると大人で八十錢とか九十錢しかもらつてゐないものもあることがわかりました。といふのはこの工事を引き受けた某公司から日本人と支那人各一人の苦力頭が現場に



②

來て、必要なだけの苦力を募集し、彼等の手で毎日日當を支拂ひ私共はその人數を承認するだけで金銭のことには關係しなかつたのです。しかしそんな噂を耳にする度に彼等に注意を與へました。すると彼等の答へは必ずかうなのです。金を支拂ふ時には正確に勘定して村長に支拂はせる、受取は全部村長からとつてあると。それで事實平均に金が渡されてない點を上げると、彼等はいつて逃げを張ります。そんなことを一々細かく言つてもらつては困りますな、村長だとか親方が五錢や十錢づゝ上前をはねるのは支那人としては當り前のことですから、それをやかましくいふと仕事が出来ませんと。しかし村長や親方に當る人間といふのは、終始雲崗村長の第一人が苦力の世話をやいてゐたのですから、若し彼が苦力一人々々について二、三十錢づゝとつてゐたとすると、苦力が二百人も出た日には一日に、數十圓の上り高となりますが、そんなことは考へられません。もうこゝまで書いて來れば、誰にでもわかる様にこれは会社の苦力頭達が適當に村長の弟に金を與へ請取書に盲判を押させて

るのです。實際彼は文字のわからない男でした。それで彼等が始めから村長などを臨時の苦力頭として使ふのは自分等の習慣だといつて主張した理由もわかります。仕事の終つた薄暗い夕方に隣村から働きに來た子供達が、三十錢づゝもらつて歸つて行くのを見た時には何だか涙ぐましい氣になり、彼等に對する義憤から翌日には又もその問題を蒸し返したりしたのでした。

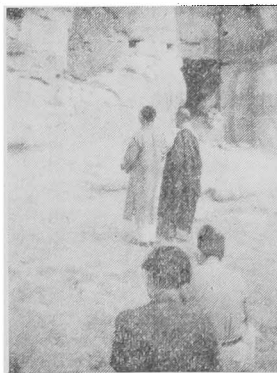
實際、大陸に於ける請負業者のあるものが、支那に從來からある惡習慣を改めるところか、それをよい口實にしてなほも一層惡辣なことをやつてゐるといふことがわかりました。さういつた點を責めたてゝ監督を嚴重にすればする程、苦力頭達の働きぶりは日に／＼目だつて鈍つて行くのでした。彼等の金錢に關する思はしからぬ態度は、村長の弟からも苦力達からも屢々^{モリアイズ}法子といふ表現を以て聞かされました。さうしてゐる中に村人達の間に私共こそ彼等の味方であるといふことがわかつて來、私共のいふことは信用する様になりました。

私共は大陸で考古學の發掘をする場合、

古蹟保存の工事をする場合に、かういつた組織が如何に障害となるものであるかといふことをつく／＼と體驗しました。或はこんなことは大工事の場合に比べたら何でもない些細なことかも知れませんが。しかしかゝる障害は私共の仕事にとつては眞に根本的の問題であり、費用の少ない學術的の事業にとつては捨ておきれないことではありませんか。如何に政府が文化事業の爲に血のにじみ出る様な金を拮出して、古蹟保存などを企てゝも彼等一部業者の利己心によつてその修理がよい加減のものとなり、又民心に惡影響を與へる様な結果となれば、折角の事業も全く無意義のものとなつてしまひます。従つてかゝる古蹟保存といつた將來利潤をもたらしえないそれが觀光施設を伴ふ場合は別ですが――文化事業には、特に當局者の細心なる注意は勿論、業者がかゝる事業の眞意義を解して良心的な仕事をするといふことが根本的に必要なことと思はれます。

又こんなこともありました。發掘をしてゐる、地ならしをしてゐる地中から出て來るのは土よりも石の方が多い位で、石のや

り場にはほと／＼困りきつてしまひました。これは北魏の石窟開鑿の當初、垂直の岩壁を作る爲めに削りとつた岩もありませうし、又洞窟を開いて行く時に切り出した岩もある筈です。東方窟の方には昨年築いた石垣の東に將來も更にこれを延長する計畫があつたものですから、驢馬を備つてこれらの石を一應東の方に運



③

び出すことにしました。驢馬の賃銀は一回運ぶ毎に一頭に就いて十二錢ときめました。西方窟の方から東方窟のはしまでその距離は一軒近くもありますから、一日に十五回も往復するのがやつとのことなのですが、一人で二頭も三頭も驢馬を追つてをれば彼等にとつてはなかくよい仕事になるのです。驢馬はいつも石炭を運ぶ時と同じ柳の枝を編んで作つた

筐^{コッパン}を背の兩側にくくりつけてやつて來ます。中にはするい奴があつて、その筐の上に大きな平石を蓋の様にかぶせ、その上にたゞ二つ三つ石をのせただけで平氣で運んで行くものもありました。そんなのを見つけて叱りつけるだけでも随分骨が折れたものです。さうして彼等は大概一日に十五回運び終ると、馬を休める爲めに土運びの人夫達よりも三十分や一時間早く切り上げるのが常でした。



④

或日の夕方仕事が終わつてから、毎日の様に土掘りの人夫達を整列させて人員を數へた時、その中に黠^{アツ}間驢馬を追つてゐた孫といふ青年がまぢつてゐたことを後で感づきました。つまり彼は驢馬に對する賃銀を既に受取り乍ら、更に賃銀の二重取りをしたわけなのです。苦力達の味

方をしてやつた私共は實は彼等にもなめられて居た形です。翌日私共は彼をつかまへてその不正を白狀させようとしたが、支那人の常として始めは容易に口を開きませんでした。しかし結局彼にはそんなに深い下心があつたのではなく、村の劉といふ男にそゝのかされて單なる出來心からやつたのだといふことがわかりました。その劉といふ男は、このことが警備隊に聞えたので大いに恐れをなし早速その晩中に逃亡してしまひました。これは私共にとつては何でもない問題、でそれだけで片附いたと思つてゐた所が、今度は警備隊長が妙なことを言ひ出しました。

當地警備隊長の某伍長は、こゝで使つてゐる苦力はすべて我が愛路村のものであつて、自分は非常な犠牲さへ拂つてその宣撫に盡して來た、元來支那人にとつては悪いことをしても辨償さへすればその罪は消えるのであつて、それを一々とがめたてされるのは甚だ面白くないといひ、或は又自分が警備隊長として愛路村の人間を苦力として世話したにも拘らずその中に斯様なものを出したことは皆様

に申し譯がない、などといふのでした。出鱈目の理由だとは思ひましたが、とう／＼權力を以て苦力を來させなくしてしまひました。そこで私共は、それでは仕方がない、かく工事を中止されて未完成のまゝに放置しなければならぬといふことは誠に不徳の致す所である、抑々雲崗の石佛は世界的な史蹟であつて、この保存事業に私共が關係し、不首尾に終らしめたといふことは重大な責任であるから、政廳を始め各方面の諒解を求めなければならぬと申込みました。そしてあわてた隊長がとめるのも振りきつて大同の町に出かけました。本當にこんな馴れないヂエスチユアをも使はねばなりませんでした。

大同で數日間休養してゐるうちに、やがて仕事はもと通りに始まりました。その間には大同にも初雪が降つたりして氣候は俄かに寒さを加へました。十六日にやつて來られた水野さんは所用の爲張家二や北京へ行くこととなりました。其の間に露佛の前方からすばらしい石佛が現れました。二十三日に水野さんが再び戻つて來られると、待ち兼ねた私共は早速

大同へ出ることをしました。最後の日、即ち二十四日の午後、露佛の前で五銖錢一個を得ることが出来たのです。待望の北魏鑄貨の一例だと雀躍しました。二十七日には政廳のトラツクで渾源縣へ行つて、李峪村を訪れ、秦式銅器の出土地を親しく調査することが出来ました。又馬蹄で澧水の氷をふみながら恒山の山麓をめぐることも出来ました。これ等のことに就くは何れ改めて詳しいお便りをしませう。

雲崗滞在中、十一月十三日附の蒙疆新聞に、「膝を出した大露佛、二學徒の貴重な收獲」といふ見出しで、私共のことがのり、その中に、寢食を忘れ時代の變轉も意にかけず、ひたすら學者としての誇りを持ちながら日夜その探究に盡瘁してゐる云々といふ記事がありました。そこで私共は早速次の一文をものして同新聞に抗議を申込んだわけです。これは同二十二、二十三兩日に亘つて「石佛保存事業の意義に就いて」といふ表題の下に學藝欄に掲載されました。

本月十三日の蒙疆新聞に雲崗石佛の保存工事に關するニュースが掲載され、

膝を出した大露佛といふ見出しのもとにその工事の由來や露佛の發掘或は學術的調査の結果等に就いて詳しい記事が發表された。その中に於て我々二人の調査及び收獲のことが餘りにも大書されてゐるのを見て、これに驚き且つ自ら顧みて汗顔の念を禁じ得ないのである。しかしながら、その初めの方に我々兩人が、時代の變轉も意にかけず探究に盡瘁してゐるとあるのは聊か意外であつた。これは、かゝる事業の性質を理解する上に於て或は一般の誤解を招く處れがありはしないかと解せられる、といふのは石佛の保存といつた様な事業が時代を超越したもので、現代に何の係りもない無意義なことを考へられ、又我々の従事する歴史學、考古學などが、この非常時に於て如何にも迂遠なものと思はれ易いものだからである。或はこの記事を書かれた方の意志はかゝる點にあるのではないかも知れないがしかし一應この種古蹟保存といつた様な文化事業の意義を述べて我々の立場を明らかにすると共に、この機會を利用して今回の調査の結果

に就いて一言したいと思ふので、敢てこの一文を草するわけである。

抑々雲崗の石窟が一千五百年前北魏文化の精華であり、世界的な佛教藝術の寶庫であることは今更ら言ふを俟たない。これは四十年前我が伊東忠太博士によつて學界に紹介されるや、俄然全世界の注目を惹いたといふ様な關係もあり、今次の事變以前からも我が一部人士の間に於ては親しい存在であつたのである。それが皇軍の大同入城と同時に逸早く石佛保護に關する布告となり隣邦の古代文化尊重の麗しい態度として、内外の心ある人々に好感を以て迎へられたことは申す迄もない。治安の確立と共に從來少數の人々にのみ許された機會が、漸々數多の者に對しても開放される様になつた。かくてこの石佛は、我が飛鳥、奈良朝に華咲いた佛教藝術の源流であると共に一般に認められる様になり、それと共に、一面北魏藝術の偉大さが愈々深く認められるに至つた。他面默視するに忍びざる現狀の荒廢振りも痛感されないうでなく、價值認識の増加はそれに正比例する保

存必要の叫びとなつたのである。

然るに晋北政廳に於ても着々として保存事業を具體化し、昨年度には巨萬の費用を投じて土地を買収し、民家を移轉せしめて古蹟地域を設定し、管理處を置いてこれが保護と觀光の便宜とを計つた。又最近に於ては、廣く内外に呼びかけ大規模なる石佛保存協賛會の成立を見んとしてゐる。又本年度は興亞院蒙疆連絡部から多額の助成金を得て同政廳文教科が保存計畫實施の第一歩を踏み出すことゝなつたのである。

蓋し今日の如き非常時に於ては、かゝる古蹟保存の如き事業は火急を要せざるものとして兎角看過されがちであるが、當局者が文化事業の重要な一部門として取り擧げてゐることは特筆に値することである。抑々先人の偉大なる文化的遺産は、これを究めることに依つて過去に對する知識を増加するものであると共に、將來の新文化創造の糧となるものであることは今更ら論するまでもない。古蹟保存事業の意義は實にこゝにあるのである。而も他面

亦かゝる文化事業の實施といふことは爲政者のゆとりある態度の示顯であつて、且つは一般民衆に對してもなごやかな雰囲気を出す所以でもある。石佛の保存事業といふものも亦かゝる認識に於て眞の意義が理解されるのであつて、從つて決して時世の變轉をよそにした閑事業ではないのである。從來の關係から我々は政廳の依頼を受けて現地調査にたづさはつたのであるが



(5)

かゝる認識の點に於ては人後に落ちない積りである。

さて今回政廳に於て行はれた事業は保存、觀光、學術的調査の三點に主眼を置いたものであつた。といふのは保存には學術的調査は絶対に必要であり、學術的調査によつてその價值が認

められてこそ始めて保存の意義を有するものだからである。從つて政廳が保存の眞意義を解して、學術的調査の一項を加へたことは又適切なことであつた。さうして已に本紙上にも紹介されてゐる様に、昨年の民家移轉のあとを受けて、排水、整地等を行ひ、先づ外貌を整へると共に保存の基礎工事を實施したわけである。その際勿論各石窟に就いての詳細なる保存計畫をも立案することを忘れなかつた。

なほ今回の學術的調査の一般を紹介すれば、先づ露佛の埋没せる膝部以下を發掘してその全貌を現したことである。その結果、推測にたがはす頗る均勢のとれた傑作で雲崗石佛中の白眉たる貫祿を失はぬものであり、且また從來より考へられてゐた如く、これは元來洞窟中に鑿られたものであつて、その前壁の倒壊によつて現在の如き露佛となつたものであることが確認された。倒壊せる岩石の下に北魏の瓦や木炭の類が壓しひしがれてゐる所から見れば、その倒壊はまた確言するには至らないが相當古い年代に遡るものであ

らう。

又第九窟及び第十九窟の前部からは遼代の甃敷があらはれ、殊に後者にはその下に北魏瓦の包含層があつたことは甚だ興味深い。遼朝の雲崗石佛に對する保護、尊崇の事情は文獻には全く見えないことであるが、舊龍王廟址の發掘の結果等と共に今回の調査によつて殆ど決定的となつたものである。石窟の外面に往々認められる巨大にして無恰好な梁孔の如きも當時樓閣として架せられた建築物に用ひられたものと解せられる。蓋し遼朝はいふまでもなく北方遊牧民族出身であつて、その部族的性質が北魏王朝を建てた拓跋部に頗る近いのである。この民族によつて北魏の偉大なる文化的遺産が繼承、發揚されたわけである。このことは清朝が入關後間もない順治四年に早くもこの石佛寺の伽藍を重修してゐるといふ事實と合せ考へても甚だ歴史的意義が深い。この清朝も亦中原に君臨して漢族を統治した北方出身の部族に外ならぬ。かゝる事實は吾人の立場に對して多大なる示唆を與へるものであらう。

その他特記すべきものとしては石窟西部臺上寺院址の發掘である出土物としては先づ瓦類で、その製作の大きく燒きなりのよい精緻なことは驚嘆すべく、瓦當の文様は傳祚無窮の四字を表したものが多く、中からたゞ一つの破片ではあつたが蓮瓣瓦當の出たのは注目すべきことであつた。この向日葵のやうな蓮瓣文様は雲崗石窟に現れた裝飾意匠の一である特徴あるものであつて、これが北魏の製作であることは一點の疑ひを挿む餘地がない。即ちこれが學界から待望されてゐた所の從來確實に知り得た東洋最古の蓮瓣瓦當である。尙ほ黄色味を帶びた釉藥を塗つた瑠璃瓦も多數得られた。これもその出土狀態と形式とからいつて確實なる北魏時代の遺物である、この外當代の完全なる蓮瓣極瓦や當時の特色ある紋様をあらはした壺、鉢の類があつた。今回は試掘といふのが適當なやうな小規模な發掘ではあつたが、北魏時代の優秀な文物を推測せしめるに十分な遺物を發見することが出来たのである。

以上記した所はやゝ岐路に外れた部

分があるかも知れない然し要するに石佛保存の現代的意義と我々の擔任した調査方面の一端である。現在當局者の實行しつゝある保存事業は、實に劃期的な意義を有するものであつて、嘗て蔣介石の如きも親しくこの地に至り聲を大にして保存の必要を説きながら遂に實行されなかつたものである。然るに誕生未だ日ならざる晋北政廳が眞劍にこれを實行しつゝあることは特記するに値する。敢てこの一文を草した所以はたま／＼この度の機會を利用して紙面を拜借し、我々の従事する東洋史學研究の立場から古蹟保存の意義と、當面の問題である石佛保存事業の性質とを少しでも多くの人々に理解していただくと思つたからである。

(寫眞説明)

- ① 露佛の向つて左前より出土した小佛龕。これは石窟岩層の脆弱なる部分に嵌挿したものである。
- ② 西部臺上北魏寺院址の發掘情況。
- ③ 發掘前の念經。右が石佛寺住持開本和尙。
- ④ 膝部發掘前の露佛。
- ⑤ 發掘された露佛の膝。